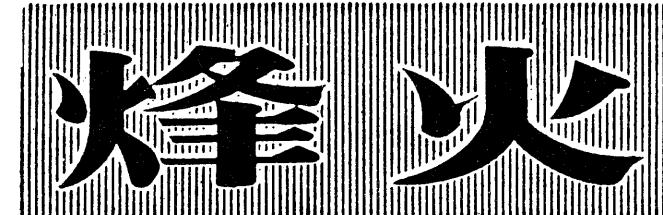


★帝国主義の侵略反革命を粉碎し全世界の帝国主義を打倒せよ！ スターリン主義との国際党派闘争を組織し、世界プロレタリア革命—世界プロ独一共産主義を組織する世界単一党を国際階級闘争の最前線に創建せよ！

1985年
4月25日
第361号
編集発行人 高木一夫
一部 200円



共産主義者同盟（全国委員会）

- 大阪戦旗社 大阪市大淀区本庄東2丁目2の31
とみやビル15号 Tel(06)371-3706
- 郵便振替 大阪3-63333 高木一夫
- 銀行口座 第一勧銀 515-1058150 高木一夫
- 沖縄 那覇東郵便局 私書箱 2016号

革命ニカラグアに対する米帝の軍事侵攻策動がこの春一段と強まっている。

米・ホンジュラス合同の大規模軍事演習「アワスター」が、二月から五月にかけて一万の兵力を動員して行なわれ、四月八日から一三日にかけては、国境五キロの地点で対ニカラグア戦と称して実戦ながらの戦車演習がくりひろげられた。米帝はこの期間に、ニカラグア軍事侵攻のための「万全の準備」をととのえつつ、露骨な戦争挑発をくりかえしている。

一方、ニカラグア政府は、二月二七日「新和平提案」を発表し、キューバ顧問団の撤収、ミグ戦闘機購入延期などのギリギリの譲歩を行ないつつ、米帝との直接会談を呼びかけてきた。何としても、米帝の軍事侵攻

春季政治闘争に起て！

現代過渡期世界の止揚を

いま世界はどうなっており、どのような方向に進もうとしているのか。

世界は大きくわけて、米帝を中心とする帝国主義諸国と、これらのもとに植民地化された多数の国々と、ソ連、中国をはじめとする労働者国家とかなり立っている。資本主義の最高の発展段階としての帝国主義はいたるところで矛盾と危機を深め、プロレタリアートの社会革命—共産主義の到来はさけられないものとなっている。しかし、いまだ全世界の圧倒的な富と生産力はブルジョアジーの手にぎられている。

われわれはいまこのような時代に生きている。一九八五年もまたこののような特徴を明らかにしている。一九八三年から八四年にかけて世界経済は一時的な回復期をむかえていたが、それは持続的な帝国主義の経済的安定を意味してはおらず、八四年後半から八五年にかけて次の大きな経済危機の前兆をしめしている。帝国主義各国は、次の大きな経済危機にむけた体制固めに入っている。

労働者国家と党は、この時代の全世界階級闘争を領導していくために備えることなく、ますます自國権益の防衛に自らの任務を解体している。反帝民族解放闘争は、アジア、ラテンアメリカ、アラブ、アフリカで拡大し、帝国主義の攻撃によって変質と個別撃破の危機にさらされているが、社会主義への前進の課題に直面している。

一九七四／七五年、一九八〇／八二年の二度にわたる経済危機は、第二次大戦後の帝国主義の最大規模のものであった。しかし八三年にはじまる米帝の景気回復によって、各国帝国主義は対米輸出増、失業率低下などの回復の傾向をしめしてきた。しかし、一九八四年後半における米帝の経済成長率の大幅な低下は、この景気回復が持続

を阻止するためにである。にもかかわらず四月二日、

この会談にのぞんだ米帝・シルツ国務長官は、ニカラグア周辺国への革命支援をやめること、軍事力削減、キューバ、ソ連と手を切ることなどを要求し、和平提案をつづねた。そしてこれと連動して同日、CIAに指揮されたコントラ（反革命勢力）が、ニカラグア

革命政府の武装解除を要求し、「四月二〇日をもって

平和的解決の道は閉ざされる」との最後通告を発した。

すでにニカラグア経済は、反革命ゲリラによって八年、一年間でニカラグア総輸出額の五〇%にあたる二億五千万ドルの損害をうけているのである。

困難な状況を強いられながらも不屈にたたかうニカラグア人民に対する連帯行動を！ 圧倒的なカンパを！

日帝の戦争とファシズム準備の嵐が吹き荒れる中で、わが国プロレタリアートの前には、この攻撃に屈するのか、それとも自國帝国主義打倒プロレタリア独裁権力樹立に進むのか、客観的にはこのふたつの道以外にありえない時代に突入している。

資本主義のもとでは、プロレタリアートは永遠の賃金奴隸である。そればかりではない。この帝国主義の時代、プロレタリアートはブルジョアジーの利益のために他国のプロレタリアートの兄弟を殺しあう侵略反革命戦争に動員されざるをえない。プロレタリアートがこの運命から解放される道はただひとつしかない。資本主義を廃絶し、プロレタリアートの経済的解放を中心とする社会革命—共産主義社会の建設にまで前進することである。そのためにこそプロレタリアートは、ブルジョア独裁権力を打倒し、樹立したプロレタリア独裁権力を武器として、資本主義とブルジョアジーとの闘争を最後までおし進めなければならない。

これを実現するためには、プロレタリア政治闘争をこれまでにもまして全国的に、大規模に、かつ拡大再生産をくりかえし組織していかねばならない。全国のたたかう労働者人民はわれわれとともに今春期、大衆的ブルジョアジーと政治統一戦線建設の先頭にたち、プロレタリア政治闘争の前進をかちとれ！

的なものではなく世界資本主義の次のより大きな恐慌を準備していることをしめしている。八五年「年頭教書」において、米大統領ハーランドは「第二のアメリカ革命」を主張し、「古びた常識に挑戦せよ」と①戦略防衛構想、②税制改革に見られる財政赤字の労働者への犠牲の集中、③これら軍事力の経済力の回復をもつての世界支配の確立をうたいあげている。

米帝をはじめとする帝国主義は、イギリス・サツチャードの「緊縮経済」、日本や西ドイツの「財政再建」「行政改革」によって、帝国主義間対立における国際競争力を強めている。また軍事的には、戦略核戦略の増強による対ソの軍事優位と、世界のあらゆる反帝民族解放－社会主義への短期における武力制圧を柱として帝国主義戦争の遂行本制が各国ご

とに準備されている。こうして帝国主義は、次により深い世界資本主義の危機と帝国主義間対立の激化、帝国主義世界戦争のおとずれが避けられないことを知つて、この危機に向けた全面的な体制固めに入っている。

現在、全世界にはソ連、中国の大団をはじめとして、東欧の労働者国家群、アジアにおける朝鮮北部、ベトナム、ラオス、カンボジア、ラテンアメリカに沿するキューバよどみの

帝国主義の世界危機が深まつていくことに
対して、全世界の階級闘争を領導する任務に
備えることではなく、自國権益の確保、拡大
に、あるいは自國生産力の防衛にソ連、中国
などの大国は、ますます党と國家の任務をし
ぱりつけている。ソ連は、米帝との軍備競争
・経済競争による「対米優位」・自國権益の
拡大路線に走り、これを実現する「ソ連国家
・全人民国家・共産主義」であると全世界の
アーレタリーアートを欺き、裏切っている。ま
た中国は、「近代化」とそのための国際的環
境の確保・帝国主義との外交に、すべての国
労働者国家が存在している。

際連帯と領導の責任を解消している。多くの労働者国家と党に援助と連帯を進めるべきソ連と中国のこのような現状のもとで、幾多の労働者国家が、その革命の防衛と發展のためにたたかい続いている。中南米の小国リニカラグアがそうである。

第二次大戦後、政治的に独立したはずの多数の諸国と民族が、いまだお帝国主義の新植民地支配の圧政に苦しみ、世界資本主義の危機のもとでお一層、苛酷な状態におかれて

これらの国のうち急成長をとげたとされている
「債務奴隸」としての運命を強制され
ている。アフリカでは「(a)広範囲におよぶ深
刻で、いつまでも続く干ばつ、(b)国際経済環
境の急速な悪化」(国連特別覚書)の結果と
しての、極度の経済破綻・飢餓状態をしいら
れている。この「国際経済環境の悪化」こそ
いるブラジル、韓国でさえその実アメリカや

階級的労働運動の共闘を

帝国主義の危機の増大と労働者国家党が反帝民族解放闘争と、その社会主義革命への前進のためのたたかいの存在。こうした世界情勢に直面している日本の労働者は、自己帝国主義との闘争を通して自らを唯一の革命的階級として成長させ、全世界の革命的変革・共産主義世界革命の主体として前進していく以外に、自国と世界の現状を変革していく道はない。このような日本の労働者のうえに、かつてない大規模な攻撃がかけられている。

「資源を持たざる国」 日帝は、さしつま
る世界危機にむけて、帝国主義間対立 「経

て進められ、それは改憲によつて集大成されんとしている。

社会党は公然たる帝国主義の同盟者への道を転落し、共産党は「民族を守れ、戦後民主主義を守れ」運動によつて、「議会での多数派の形成―国家権力の民主的改革||社会主義の旗で、たたかうプロレタリアートを欺いている。われわれは、広範なプロレタリアートを社共の影響下から解きはなち、この戦後史を画する日帝の攻撃と対決し、帝国主義の世界危機に際して全世界のプロレタリアートの先頭に立つてたたかわねばならない。

運動の共闘を

帝国主義による原料の価格低下、債務の激増
保護貿易主義による輸出低下などによつて
もたらされたものである。これらの新植民地
諸国の絶対的貧困層は、七億八〇〇〇万人に
たつし、東南アジア、アラブ、アフリカ、ラ
テンアメリカの国々に散在している。

危機の深まりにともなう反帝民族解放闘争
の拡大と高揚はさけられない。そして、韓国
フィリピンなどの反帝民族解放闘争はさし

「済戦争」を強化し、新植民地支配の強化・侵略反革命戦争の独自的準備を進め、全面的な帝国主義戦争への道をひた走る以外にない。こうして日帝は、いまや侵略反革命戦争の遂行を一大焦点として、戦後支配体制の全面的転換へと向かっている。

軍事的には、「チームスピリット85」＝米韓合同軍事演習にさいしての、横田・沖縄などの米軍基地の直接出撃基地化、日米合同演

橋渡し役をはたしたい」（山岸委員長）と主張し、総評の内部からその最後的解体の先兵として装い新たに登場しようとしている。また公労協の残る主力単組国労も、国鉄の分割・民営化攻撃の一環である合理化三項目提案（退職勧奨、一時帰休、出向など）との全面対決を放棄し、たたかいの旗をおろそうとしている。

全民労協春闘はこうした総評の解体にとどめをさしたのである。

多くの予想と期待を裏切って、総評はその解体過程において、大きな流動を生みだすこととはなかつた。総評は労戦統一問題において当初の「基本構想」にたいする補強五項目見解すら棚上げし、何の独自性をうちだすこともなくするすると同盟・JCにひきずりこまれた。いやむしろ総評内右翼潮流は二枚舌を使つて労働者大衆をたぶらかしながら、同盟・JC路線に積極的に合流していつたと見るべきであろう。これにたいし労研センターなど、総評の防衛や再生をかけた反対派も、その本質的な保守性ゆえに、有効な反撃や組織戦をほとんどになうことができなかつた。またこの部分に過大な期待をかけて戦略を描いた第四インターなど、右翼日和見主義者たちの夢も無惨に崩れた。

八〇年代に入つて急速に現実化した「労戦統一」は、八七年全民労協の連合体制をひとつメドにして後半過程に入ろうとしている。われわれは「労戦統一」運動の開始に際して、これがブルジョアジーによる戦後労働運動の再編を通じた、プロレタリアートにたいする階級解体攻撃であり、侵略反革命戦争準備の重要な一環であることを暴露してきた。そしてこれに対決するためには総評守れ運動では不可能であり、独力で階級的労働組合の拠点を築き、この再編過程に左から切り込んでいくことを訴えつづけてきた。全国で自立労働組合連合、京都・洛南労組連絡会議をはじめとして、反「労戦統一」をかけた新たなたたかいがここ数年間、力強く前進してきた。しかし本格的な組織戦はこれからである。情

我々の春期政治闘争基調

わが国のプロレタリアートの圧倒的多数はいまだ分断され、経済闘争すら充分にとりくめない現状にある。すべての先進的労働者、学生は、自ら大衆の護民官的前衛、政治的前衛となつてこの現状と切り離れることなく、プロレタリアートの大軍を政治行動にひきいれ武装蜂起一プロ独へと前進させつづける大衆のプロレタリア政治闘争を組織するため奮闘しなければならない。われわれは、今春期政治闘争上の任務を以下の三点において提起する。

第一に、全国各地に大衆的プロレタリア政

勢は、総評崩壊後をみすえた階級的労働運動の全国的陣形の建設・強化を要求している。全国の戦闘的労働組合と労働者活動家は、このための実践にただちにとりかかるべきである。

当面次の諸点が重要な任務である。

第一に、反「労戦統一」派の全国的共闘の形成・強化をいそぐことである。われわれをふくめ、八〇年代前半期において反「労戦統一」派は、全民労協に对抗しうる実力をもつた陣形を獲得できなかつた。そのおもな原因は、多くの部分が総評主義・戦闘的経済主義に汚染され、社会党・総評ブロックの枠内で左派反対派に意識的・無意識的にとどまるうとしつづけたことにある。独力で拠点を築き、崩壊しつつある総評主義と総評運動の圈外に、階級的労働運動の展望を求めるようとした部分はむしろ少数であつた。したがつてわれわれは、現在、たとえ反「労戦統一」をかける諸組織や共闘関係がいくつか存在しているにせよ、その直接延長線上に何らかの展望を見出しうるとはまったく考えない。それらの諸組織の再編をふくんで、新たな共闘関係が形成されなければならない。

第二に、階級的労働組合の統一戦線形成を保障する行動綱領を獲得することである。現在、「労働者綱領」「労働者宣言」などとして論議されているものは、このような目的のための行動綱領に結実させられなければ意味を失うであろう。

全民労協春闘に對決してたたかわれている先進的労働者たちの春闘は、このようないき、階級的労働運動の陣形を拡大していくことである。地評の解体に備えて、洛南労組連合を京都全体の労組連へと拡大していくこうとする京都での新たな実践をわれわれは支持する。このようないき、階級的労働運動の陣形を拡大していくことをうなづかねばならない。

第三に、ひきつづき地域・産別に拠点を築き、階級的労働運動の陣形を拡大していくことである。地評の解体に備えて、洛南労組連合を京都全体の労組連へと拡大していくこうとする京都での新たな実践をわれわれは支持する。このようないき、階級的労働運動の陣形を拡大していくことをうなづかねばならない。

そのためにこそ、この流动を資本主義の改良と帝国主義の政策変更の要求へ、排外主義の流动の中から、プロレタリア国際主義に貫かれ、武装蜂起一プロ独へと前進しつづけるプロレタリアートの政治決起を全力で組織しなければならない。

社会党はこの数年間、安保容認、自衛隊容認へとひた走ってきた。そして本年の第四回回党大会では、「言葉のうえからも「社会主義革命」や「階級闘争」を完全に消し去るために、これまでの綱領や綱領的文書である「日本における社会主義への道」を歴史的文書へと棚上げし、捨てさつた。そして社公民路線どころか自民党との連合政権すら展望し、社会党がもはやプロレタリア階級の利益とは全く無縁な資本主義擁護、帝国主義擁護の党になりはてたことを鮮明にした。さらに社会党は、「稼動中の原発容認」、韓国全斗煥軍事独裁政権の承認につながる今秋の訪韓団の派遣など反動の方針を次々と決定している。

日共は、昨一二月の日ソ共産党共同声明を

務ではない。建設すべきは、全国主要都市における階級的労働組合運動の陣形を基礎にした常設的な大衆的政治共闘である。

八三年秋のレー・ガン来日訪韓阻止闘争を契機にして、京都では階級的労働組合運動の共闘を基礎に「京都労働者実行委員会」が組織され、ひきつづいた昨年六月トマホーク極東配備阻止闘争、九月全斗煥来日阻止闘争をたたかいた。われわれは、このたたかいを支持し大衆的プロレタリア政治統一戦線として強化すべく努力してきた。今春期、常設化された京労実の発展のために努力するとともに、全国各地に大衆的プロレタリア政治統一戦線を形成するためのたたかいで大胆にふみださねばならない。

第二に、ひきつづく反戦反核運動を六月反安保闘争の高揚へと領導することである。いまだ武装蜂起一プロレタリア独裁から遠くへだてられているとはいえ、全世界をおおう米ソ核戦争の危機の増大と各国帝国主義の戦争とファシズム準備の激化は、プロレタリア人民を日々政治行動にひき入れつづけている。西欧諸国、オセアニア諸国における反戦反核運動の高揚は、各国民政府と米帝の矛盾を拡大し、オランダの中距離核ミサイル配備の延期、ギリシャのNATO演習からの離脱、ニュージーランドの米核艦船入港拒否などを生みだしてきた。被爆四〇周年を迎えたわが国でも、八二年の大高揚、昨年のトマホーク配備阻止闘争をひきついで広範な反戦反核運動がたたかれており、六月一六日には、トマホーク配備阻止全国運動などの市民団体、労働情報を中心とする中央集会が予定されている。この流动の中から、プロレタリア国際主義に貫かれ、武装蜂起一プロ独へと前進しつづけるプロレタリアートの政治決起を全力で組織しなければならない。

そのためにこそ、この流动を資本主義の改良と帝国主義の政策変更の要求へ、排外主義の流动の中から、プロレタリア国際主義に貫かれ、武装蜂起一プロ独へと前進しつづけるプロレタリアートの政治決起を全力で組織しなければならない。

社会党はこの数年間、安保容認、自衛隊容認へとひた走ってきた。そして本年の第四回回党大会では、「言葉のうえからも「社会主義革命」や「階級闘争」を完全に消し去るために、これまでの綱領や綱領的文書である「日本における社会主義への道」を歴史的文書へと棚上げし、捨てさつた。そして社公民路線どころか自民党との連合政権すら展望し、社会党がもはやプロレタリア階級の利益とは全く無縁な資本主義擁護、帝国主義擁護の党になりはてたことを鮮明にした。さらに社会党は、「稼動中の原発容認」、韓国全斗煥軍事独裁政権の承認につながる今秋の訪韓団の派遣など反動の方針を次々と決定している。

「核戦争阻止、核兵器廃絶にむけた歴史的宣言」と吹聴し、共同声明にもとづく反核運動をよびかけている。しかしその内容たるや、反核運動を核戦争による絶滅から人類を救済するための運動にまで反動的に固定し、「レーガン大統領も一再ならず核兵器をなくしたいと言っている」（宮本議長）のだから核兵器は廃絶できるはずだと底ぬけの米帝および帝国主義の擁護をおこなっている。

他方、「日本はこれでいいのか市民連合」などの俗流市民主義者も社共と同様に「日本を米ソの核の戦場にするな」と叫び、反安保というスローガンですら日本帝国主義の打倒のためにではなく、「安保から離脱した平和な日本を作る」なる小ブルのあどけない願望のものとにプロレタリア階級闘争を解体する目的で言うのである。そして第四インター、プロ青をはじめとする右翼日和見主義党派が、俗流市民主義者のあいもかわらぬ尻押しをつけている。

これら一切の排外主義、日和見主義のふりまく見解とは異なり、核戦争を含むいっさいの帝国主義戦争は、全世界で帝国主義を打倒することによってのみこの地上から根絶することができる。そしてわが国プロレタリア人として日米安保を核安保に強化し、朝鮮・アジアへの侵略反革命戦争にひた走る日帝を打倒し、プロレタリア独裁権力を樹立することである。すべての先進的労働者・学生は、このことを大胆に宣伝し、反戦反核運動にたちあがるプロレタリア人民を反安保から反日帝へ、プロレタリア独裁権力の樹立へと前進させつづけていかねばならない。

第三に、全世界で燃えあがるプロレタリア階級の解放にむけた闘争とその要求を、支援し発展させる国際連帯行動にわが国プロレタリアートを深部から起ちあがらせていくことである。われわれは今春期におけるその焦点として、ニカラグア革命連帯行動と日韓連帯行動を提起する。

ニカラグアをめぐる情勢はさらに緊迫している。米帝は、ニカラグア政府からのいっさいの平和提案をふみにじつて反革命ゲリラへの支援と直接の軍事侵攻をねらった軍事演習をくりかえしている。米帝にとってがまんの反帝民族解放＝民主主義革命にとどまることがなく、資本主義の廃絶とプロレタリア階級の解放をめざすプロレタリア社会主義革命にまで前進しようとしていることにある。ニカラグア革命をめぐってわが国のプロレタリアー

トに問われていることは、米帝の軍事侵攻を許すのか否かにとどまらず、どんなに遠くへだてられていたとしても、同じ賃金奴隸の境遇にあるニカラグアのプロレタリアートの解放を本当に願い、支援・連帯するのか否かということである。先進的労働者・学生はただち

に、わが国プロレタリア人民、とりわけプロレタリアートの中に、ニカラグア革命連帯行動をもちこみ、支援カンパ運動、署名運動、集会、デモを組織し、プロレタリアートを基礎からニカラグア革命連帯行動にたちあがらせていかねばならない。その指導と収約を通してプロレタリア階級意識をうちこみ、プロレタリア国際主義をプロレタリア階級の奥深くまで根づかせていくことこそ先進的労働者・学生がはたすべき任務である。

同時に、昨秋の全斗煥來日阻止闘争をうけついで、日韓連帯闘争を発展させつづけていかねばならない。光州蜂起から五年目を迎える韓国の労働者人民のたたかいは、日米帝国主義の新植民地主義支配と全斗煥軍事独裁政権の圧制をはねのけてめざましい前進をつづけている。昨秋の全斗煥訪日阻止闘争の爆発、韓国全学連の結成と民政党本部占拠闘争、あいつぐ労組結成と御用労組＝韓国労総の制動をはねのけた労働運動の前進など、たたかいは「反共民主化」の古い枠を打ち破り反帝民族解放闘争に前進せんとしており、その中からプロレタリア階級闘争が成長してきている。これを背景に、本年二月の金大中氏帰國直後におこなわれた国会議院選挙では、新たに反

全斗煥、民主化をかかげて結成された新韓民主党が与党＝民正党に迫る大躍進をとげ、ソウルなど都市部では圧勝した。五月の光州蜂起五周年にむけ、たたかいはもはやおじとどめようもなく前進しようとしている。日韓闘争は、韓国が日帝の新植民地主義支配下にあり、侵略反革命戦争準備の直接の矛先がむいているがゆえに、わが国プロレタリアートを排外主義と分岐させ、日帝とその侵略反革命戦争準備とのたたかいにたちあがらせていくための決起的に重要な闘争である。とりわけ二〇年目にあたる。日帝による記念式典を許さず、日韓連帯闘争の大高揚をきりひらかねばならない。そして、このふたつの国際連帯行動、とりわけニカラグア革命連帯行動の広範な基盤のなかから、プロレタリアートの国際主義的連帯の要であり、国際的なプロレタリアートの階級闘争を全世界における帝国主義の打倒＝世界プロレタリア独裁の樹立まで発展させる新たな共産主義インターナショナルを創建していくという歴史的任務への広範な先進的労働者・学生の結集をかちとつていかねばならない。

春期における労政の任務

われわれは、今春期、労働運動戦場、政治闘争戦場をつらぬいて、武装蜂起＝プロレタリア独裁を組織するレーニン主義中央集権合法党建設戦と固く結合し、武装せる革命の伝導路＝全国労働者政治委員会の新たな前進を全力で組織すべきことを訴える。

全国労政は、二・一七第二回大会をもって結成から一年半のたたかいの全成果を第一期とし、この上に第二期を開始することを宣言した。それはまだ微細であるとはい、わが国階級闘争のただ中に、革命の「赤軍とソビエト」を準備していくたたかいの確固たる一步を刻印するものであり、その根幹において他の右翼日和見主義、急進民主主義と分歧したものであった。

全国労政第一期は、わが共産主義者同盟におけるさまざまなプロレタリアートの革命の組織建設の総括のうえに、他の「中間組織」一般とは明確に区別された「今日からの赤軍－ソビエトの準備戦」としての武装せる革命の伝導路建設を宣言し、かつそれを現実の階級闘争のただ中に、先進的プロレタリアート・学生自身の革命の組織として、実体をもつて建設しつづけていく緒戦の勝利をたたかいとつたのである。「われわれは、第一期をつうじて階級的労働運動建設の戦場で、大衆的プロレタリア政治統一戦線の戦場で、革命的政治決起の戦場で、学生運動の戦場で……先進的労働者・学生の中から、わが労政の旗の

もとに結集しともにたたかわんとする多くの同志を生み出しつづけている。……さらには中から、自己を共産主義者へと前進させつけ、生涯を共産主義革命のためにたたかいつづけんとする同志たちを日々生み出しつづけている。このことは、第一期のたたかいのあらゆる個々の成功や失敗に優先して全同志の誇りとすべき成果である」と、第二回大会基調はこのようにのべた。

これを可能としたのは、右翼日和見主義のごとき組合運動への全面的抨撃や、急進民主主義のごとき反帝を唯一の基準とした個別闘争の戦闘化によっては決して切りひらきえない、労政建設の次のようなものである。すなわち、プロレタリア階級の第一次団結体とその運動に対する明確な批判的結合のうえに、厳密に第一次団結体の外部に建設され、プロレタリア大衆の内部に広範な再生産構造を有するとともに、その内部から共産主義者を絶えず輩出しつづけるというプロレタリア階級の革命の組織としての基礎的質における勝利であったのである。

われわれははつきりと確認しよう。ここに膨大なプロレタリアートの分散した要求と組織とを、プロレタリアートの武装蜂起とプロレタリア独裁の要求と、それを組織する前衛の建設にむけて脱皮させ、結集せしめていくたかいの条件をいま、この手ににぎりしめつあることを。

一月二八日から二月三日まで在比
米空軍と在沖米四軍による作戦即
応訓練「コープ・エアリフト」、

二月一日から一日まで、浦項上
陸演習の前段演習たる「パリアン
ト・アッシャー85」がおこなわれ、

両演習にはグリーンベレーも参加
している。県道を封鎖しての原子
砲実弾演習も二日間連日という規
模の拡大、二ヶ月に四回の計画一
回実施（八四年一年間で四回だ
った）という頻度の増加である。

こうした演習激化は一方でたび
重なる事故、演習被害をもたらさ
ざるをえない。「基地の島＝沖縄」
の現実は、沖縄プロレタリア人民
砲実弾演習も二日間連日という規
模の拡大、二ヶ月に四回の計画一
回実施（八四年一年間で四回だ
った）という頻度の増加である。

こうした演習激化は一方でたび
重なる事故、演習被害をもたらさ
ざるをえない。「基地の島＝沖縄」
の現実は、沖縄プロレタリア人民
砲実弾演習も二日間連日という規
模の拡大、二ヶ月に四回の計画一
回実施（八四年一年間で四回だ
った）という頻度の増加である。

の階級的利害はもちろん、生活・
生命の安全とすら相入れない。

者人民は、日米帝の朝鮮侵略反革
命戦争準備を必ずや粉碎しなけれ
ばならない。

3・31 二期阻止の決意新たに 二期阻止の決意新たに

われわれは、これまで何度も訴
えてきたが、三里塚闘争をいかな
く緊迫したものであった。

三月三一日、横堀現闘本部前に
おいて現地総決起集会が、二八七
〇名の結集でかちとられた。

集会は、二期着工と反対同盟の
解体をねらう東峰十字路裁判の判
決を目前にひかえ、これまでにな
く緊迫したものであった。

演習名	期間	参加部隊	演習場所	内 容
コープ・サンダー	1月11日～1月25日	嘉手納米空軍	フィリピン	シーレーン防衛
県道104号越え演習	1月23日		米兵による殺人事件で中止	
コープ・エアリフト	1月28日～2月3日	米軍事空輸航空 在沖米四軍	普天間飛行場 伊豆谷他	作戦輸送能力 空降下
パリアント・アッシャー	2月1日～2月11日	米第7艦隊 在沖米海兵隊	ブルーピー・ハンセン ブルーブラックその他	上陸演習
チーム・スピリット	2月1日～4月中旬	米韓兩軍 (在沖米陸・空 海兵)	韓国	陸・海・空一体 の総合演習
コープ・ノース	2月4日～2月7日	嘉手納米空軍 航空自衛隊	米訓練空域	戦闘機訓練
県道104号越え演習	2月13日～2月14日	在沖米海兵隊	キャンプ・ハンセン	原子砲による演習
雪中訓練	2月14日～2月23日	在沖米海兵隊 陸上自衛隊	北海道・上富良野	耐寒訓練
県道104号越え演習	2月28日	在沖米海兵隊	キャンプ・ハンセン	原子砲による演習
県道104号越え演習	3月19日		中 止	

今後の集会の特徴は、第一に、
二期着工に備えて実力闘争の準備
が強調されたことである。しかし
二期着工の不可避性は、日帝の戦
争とファシズム準備、あるいは、
それにむけた階級闘争の鎮圧とい
う角度からではなく、NAC(日
米航空交渉)にともなうアメリカ
からの外圧との関係で述べられる
というものであった。第二に、總
体として日帝の戦争とファシズム



四月一日、日帝ブルジョアジー
は、電電公社の民営化を強行した。
われわれがこれまで明らかにして
きたごとく、この電電民営化は、
電通労働者にとって、そしてそれ
にとどまらず、日本プロレタリア
階級的労働運動を建設していく反
撃戦の号砲としなければならない。

帝國主義間の強盗的抗争は、經
済的のみならず軍事的にもこの領域
を掌握するということにある。先進
工業化の競争をけずつていて、
この抗争においてしのぎをけずつていて
日帝にすりよる民間

である。したがって第二に、民
営化は、公共企業体の枠をとりは
ない、むきだしの、生産性の向上、
と労働者の搾取・収奪の強化を直
接目的としたものである。すでに
職場においては、民営化をみこし
て数年前から合理化攻撃の嵐が吹
きまくっていた。公社幹部は「民
営化の狙いは職員の意識変革にあ
る」と言ってはばかりず、職場で
は職制が権力をますます増大させ
「民間の競争の厳しさ」を言いた

命戦争準備を必ずや粉碎しなけれ
ばならない。

われわれは、これまで何度も訴
えてきたが、三里塚闘争をいかな
く緊迫したものであった。

開会のあいさつにたつた石井武
氏は「今年こそ、一九年間のすべ
てのたたかいの力をそそいでたた
かうべき年だ」と訴え、熱田一氏
は「中曾根は、全斗煥などとともに
に核、軍港などの増強をねらって
いる。これらとのたたかいも三里
塚闘争の勝利なくしてはありえな
い」と訴えた。続いて、東峰被告
弁護団、菅沢事務局長よりの基調
提起がなされ、各団体からの連帶
提意表明として、東峰被告団、被
告団の家族、用地内などからアピ
ールがなされた。

今後の集会の特徴は、第一に、
二期着工に備えて実力闘争の準備
が強調されたことである。しかし
二期着工の不可避性は、日帝の戦
争とファシズム準備、あるいは、
それにむけた階級闘争の鎮圧とい
う角度からではなく、NAC(日
米航空交渉)にともなうアメリカ
からの外圧との関係で述べられる
というものであった。第二に、總
体として日帝の戦争とファシズム

帝國主義労働運動に変貌する電通民同粉碎 われわれの電通労働運動本調（上）

四月一日、日帝ブルジョアジー
は、電電民営化にかけた日帝ブルジ
ヨアジーの狙いは、ますます鮮明
となっている。それは第一に、情
報通信という現代資本主義の「戰
略産業」を直接ブルジョアジーが
掌握するということにある。先進
工業化の競争をけずつていて、
この抗争においてしのぎをけずつていて
日帝にすりよる民間

である。したがって第二に、民
営化は、公共企業体の枠をとりは
ない、むきだしの、生産性の向上、
と労働者の搾取・収奪の強化を直
接目的としたものである。すでに
職場においては、民営化をみこし
て数年前から合理化攻撃の嵐が吹
きまくっていた。公社幹部は「民
営化の狙いは職員の意識変革にあ
る」と言ってはばかりず、職場で
は職制が権力をますます増大させ
「民間の競争の厳しさ」を言いた

命戦争準備を必ずや粉碎しなけれ
ばならない。

われわれは、これまで何度も訴
えてきたが、三里塚闘争をいかな
く緊迫したものであった。

開会のあいさつにたつた石井武
氏は「今年こそ、一九年間のすべ
てのたたかいの力をそそいでたた
かうべき年だ」と訴え、熱田一氏
は「中曾根は、全斗煥などとともに
に核、軍港などの増強をねらって
いる。これらとのたたかいも三里
塚闘争の勝利なくしてはありえな
い」と訴えた。続いて、東峰被告
弁護団、菅沢事務局長よりの基調
提起がなされ、各団体からの連帶
提意表明として、東峰被告団、被
告団の家族、用地内などからアピ
ールがなされた。

今後の集会の特徴は、第一に、
二期着工に備えて実力闘争の準備
が強調されたことである。しかし
二期着工の不可避性は、日帝の戦
争とファシズム準備、あるいは、
それにむけた階級闘争の鎮圧とい
う角度からではなく、NAC(日
米航空交渉)にともなうアメリカ
からの外圧との関係で述べられる
というものであった。第二に、總
体として日帝の戦争とファシズム

労協の発足以降、日帝ブルジョアジーにとって「全的統一」は総評労働運動の実際的な背景をなしてい官公労の「戦闘性」の解体になつた。この過程は急ピッチで進行し、彼らは電電民営化によって一つの大きな橋頭堡を築きあげたのである。そしてこれは、全電通民同を最大限利用することによつてなされた。

他方、民同は、公社日帝ブルジョアジーの上記の攻撃に呼応し、その反労働的性格を一層極限化

しつつ、そのふところに飛びこんでいた。彼らは第一に、従来の「労働力販売株式会社」としてのその路線をより反動的に発展させ、「生産性の向上をつうじた雇用確保」を掲げて強奪取への協力をはじめた。従来の形ばかりのチェック機能すらなげて「職員の意識改革」の先頭にたち、「雇用を守るためには民間企業での競争にうちかたねばならない。民間のみに働き、経営にも参加していく」と叫びはじめたのである。このために「労使協議会」と銘うつた経営協議会を発足させ、労働組合の実質的代行をなさんとしているのである。第二に、「組合綱領の改正」に示されたように「労働者階級」と「階級闘争」の要素のみせかけの一派を放逐しさり、「労働者参加の路線」「社会的に価値ある労働運動」とは、労働者階級と資本家階級との非和解性を公然と否定し、階級対立が存在しないことを宣言することによって、ブルジョアジーに賞讃される労働運動をめざすものに他ならない。その内容は、臨調行革攻撃の生命線であるところの、労働条件の悪化をみこし、階級対立が存在しないことを宣言することで、労働者大衆を糾合せんとするものである。第三に、政治的には、従来の「反自民非共産一社公民路線」をすら捨てさり、保革連合路線をうちだすにいたつた。そのため民同は「民社党と社会党との和解」をおしそうめ政党再編にのりだしているのである。これまで「国会外の大衆運動」については、圧力としての意義づけをおこなつていたが、それすらも投げ捨て、一切の政治を国会内に封じこめた。

以上が、全電通民同の路線の階級的性格である。四月民営化とともに、この路線は全面开花し、組合機関のより官僚化、反動化をもたらさざるをえない。全電通民同は公然とその主導権をうばい、全電通のみならず全日本のプロレタリアートを産業報国会の波の中に導き入れんとしているのだ。

前衛党建設こそ要

このブルジョアジーと全電通民同の攻撃のまえに、たたかう部分の中で多くの危機感、動搖、無防備が広がっている。われわれは、われの総括のなかから現下における電通の革命的プロレタリアートの階級的任務を明らかにしなければならない。

われわれの民同との闘争は、六〇年代の反戦青年委員会による闘争がその頂点的なものであった。

反戦青年委員会のたたかいは、もちろん真正面から日帝の打倒と社会主義を掲げた政治決起であった。

同時に、それは労働運動における労使協議会のたたかいは、もちろん真正面から日帝の打倒と社会主義を掲げた政治決起であった。

獲得をめぐる民同支配との闘争であつた。六〇年代後半の、中電マッセンストを頂点とする労働者の運動は、たしかに英雄的ではあった。民同は、この前に痛打であった。民同は、この前に動搖し、日共をもどりこみ、日帝国家権力一公社の暴力に助けられ、この危機をのりきつたのである。

現在から見ると、この政治的決起は、たしかに英雄的ではあった。

政治的決起は、この民同支配への痛打であつた。民同は、この前に動搖し、日共をもどりこみ、日帝国家権力一公社の暴力に助けられ、この危機をのりきつたのである。

政治的決起が党の建設——革命的プロレタリアートの建設とは、切斷されただままで組織されていったといふ限界である。

ここにおけるわれわれの敗北と

は、決して組合運動における敗北ではなかつた。われわれの敗北とは、当時の党建設の限界による政

治過程主義的政治闘争、それに規

定された政治的團結の質の問題で

あり、國家権力のわが党に対する底

暴的破壊によって、組合レベル

でも民同に敗北したのである。こ

の一旦の敗北をわれわれは、正しか非和解性をあきらかにすることなどありえない。これを彼らは理解することができないのだ。

第四インターは、七八年、三里塚闘争を中心に政治決起し、これ

く党の建設とそれを基軸としたところの階級的陣形建設へと総括した。それは、ブンドから脱走した

諸君達が「決起すべきではなかつた」「組合の中で足場を失つた」、したがつて「以降、組合内活動を

重視していこう」と総括し、方針化したのに對して、唯一正しい総括の出発点を獲得したのであつた。

われわれは、敗北によつて確かに多くの陣地を失つたとはいえ、電

通労働者の政治的決起の組織化、通労働者の政治的決起の組織化、

政治闘争への働きかけはいかに微力であつたにせよわれわれの一貫した任務である。民同支配下の労働者大衆に対して、われわれの政

治的働きかけなくして組合活動の領域のみで問題をたてることは敗北の道に他ならないことを教訓化しなければならない。

第四インター以外の諸君も、問題を組合の枠内でしかとらえないことによつて大同小異の誤りにおちいつている。最も特徴的なのはやその周辺の諸君は、おしなべて反戦青年委員会のたたかいは、もちろん真正面から日帝の打倒と社会主義を掲げた政治決起であった。

民同支配の強化に対しても、労働組合の枠内で対抗しようとし、またそ

れが可能であると考えている。彼らは次のように説明する。「帝国主義の危機の中で、資本は改良のための余力を失い、労働者の具体的な要求は、政治的な体制の壁にぶつかり階級利害の非和解性をあらわしていく」と。そしてつまるところ、「これが生産点の労働者管理制度へとつまり、ブルジョア体制との全面対決へ發展し、労働者の自衛武装へといたる」とされるのである。また言う。「現在の全民労協の路線は企業とのゆき、国家とのゆきをはかる労働官僚の路線である」したがつてそれとたたかうこと」だといふのである。ここには、労働組合の基礎を企業や国家から独立した組織として貫くこと」だといふのである。

政治的決起の組織化がすっぽりとぬけおちており、また帝国主義労働運動に対し「労働組合の独立」を対置してたたかうといふのである。これこそ労働組合の自然成長性に対するこの上ない讃美である。

また、党の指導的任務に対する底なしの軽視がある。党が労働者大衆を指導し、彼らを労働組合の団結を越えて不斷により高い階級的

團結へと送りだしていくこと、このことぬきに全面的な階級対決と



全電通近畿地方大会で情宣を行なう電通労政(三月七日、大阪)